

何年前か前、私が大学で言語学に専念するために、負けず嫌いばかりが集まった（そして、とてもカルト的な）演劇プログラムの履修をやめることにしたと話したとき、母親は少しも驚かなかった。いつも私のことを、まったく「カルト的ではない」と思っていたからだという。私はそれを褒め言葉と受け取った。その反対とは見られなくなかったせいだが、それと同時に、全面的な賛辞とも思えなかった。カルトには暗い要素と並んである種の魅力もあるからだ——型にはまらず、神秘的で、共同体の親密さを感じさせる面をもっている。さて、この言葉についてまた一から考え直してみる必要がありそうだ。

「カルト」は、つねに悪い意味を帯びてきたわけではない。この語がはじめて登場したのは十七世紀の書物で、そのころの「カルト」は今よりずっと無害なものだった。当時のカルトは、ただ「神に対する敬意」や、神々を説得するための捧げものという意味でしかなかった。「カルチャー（文化）」や「カルティベーション（栽培）」という語も同じラテン語の *cultus* を語源とし、形態論的には「カルト」の親戚になる。

この語が進化を遂げたのは、十九世紀はじめのことだ。それはちょうどアメリカで実験的な宗教が世間を騒がせた時期にあたる。アメリカの植民地は新しい宗教の教えを実践する自由のもとで建設されており、風変わりな信者が好きだけ奇矯な行動をとれる安全な楽園として名を馳せていた。こうした精神的自由により、アメリカには伝統にとられない社会・政治集団も大量に押し寄せており、一八〇〇年代半ばには一〇〇をはるかに越える小規模な思想グループが形成と崩壊を繰り返していた。一八三〇年代にフランスの政治社会思想家アレクシ・ド・トクヴィルがアメリカを訪れたとき、「あらゆる年齢、あらゆる身分、あらゆる気質のアメリカ人たちが、絶えず団体を結成している」⁽¹⁾ 様子に驚いている。当時の「カルト」には、ニューヨーク州北部でポリアモリー（複合婚）の共産主義的共同体を形成した「オナイダ・コミュニティ」（なんだか楽しそう）、インディアナ州で科学愛好者が平等主義の共同体を作った「ハーモニー・ソサエティ」（すてきだ）、マサチューセッツ州に短期間だけ存在した菜食主義農業カルトの「フルートランズ」（私の好み）といった団体が含まれていた。⁽²⁾ フルートランズを設立した哲学者のエイモス・ブロンソン・オルコットは奴隷制度廃止論者で、女性権利拡大の活動家でもあり、また『若草物語』の著者ルイーザ・メイ・オルコットの父親でもある。当時の「カルト」は単に「宗派」や「学派」と同様の、教会に関連する分類の一種にすぎなかった。その語は何か新しい団体や正統ではない団体を意味するもので、必ずしも無法な団体を指すわけではなかったのだ。

「カルト」の語に悪評が生じはじめたのは、第四次大覚醒が始まる少し前のことだった。その時期、社会規範にとらわれないスピリチュアルな団体があまりにも多く出現して、昔ながらの保守派やキリスト教徒を怯えさせ、まもなく「カルト」は、いかさま師、ニセ者、異端の変人と結びつけられ

てしまう。それでもまだ、それほど大きな社会的脅威や犯罪行為に及ぶ集団とはみなされていないかったのだが……一九六九年のマンソン・ファミリーによる殺人事件、一九七八年のジョーンズタウンでの集団自殺（第2部で詳しく見ていく）で大きく状況が変わった。それ以降、「カルト」という語は恐怖の象徴になる。

ジョーンズタウンで九〇〇人を超える人々が陰惨な死を遂げた事件は、九・一一以前のアメリカでは最も多くの民間人が犠牲になった出来事で、国中がカルトに対する狂乱状態に陥った。なかにはそれに続く「悪魔崇拜パニック」を思い出す読者もいるかもしれない——一九八〇年代の一時期、悪魔崇拝者が子どもを儀式に供し、健全なアメリカの人々を脅かしているという被害妄想が広まったのだ。社会学者のロナルド・エンロートは一九七九年に、著書『カルトの魅力』で次のように書いている。「ジョーンズタウンの事件が前例のないほどメディアで取り上げられたことよって……アメリカの人々は、慈悲深く見える宗教団体であっても地獄のような墮落を隠蔽している可能性があると警戒するようになった」

その後、こうした出来事ではありがちだが、カルトが恐ろしい存在になるとすぐ、「かっこいい」とみなされるようにもなった。ほどなくして、七〇年代のポップカルチャーでは「カルト・ムービー」や「カルト・クラシック」といった語が生まれている³。それは『ロッキー・ホラー・ショー』などの、新進気鋭のアングラ系インディーズ映画のジャンルを指す。フィッシュやグレイトフル・デッドのようなバンドは、公演先についてまわる熱狂的な「カルト・ファン」がいることで知られた。

第四次大覚醒から一世代か二世代あとになると、カルトに興味を抱く若者たちにとっては、その時代がノスタルジックでクールに見えるはじめた。七〇年代の過激派グループは、意外なことに今ではレトロでおしゃれだと思われるようになっていく。現在のところ、「マンソン・ファミリーに夢中」なのは、「ヒッピー時代のレコードやバンドのTシャツを山ほどコレクションしている」のと同じようなものだ。最近、ロサンゼルス美容院で客の女性が担当のスタイリストに、「マンソン・ガール」のヘアスタイルにしてほしいと話している声を耳にした。伸びすぎに見えるほど長い髪を、栗色に染めてセンターで左右に分けるといふスタイルだ。また二十代の知人は、ニューヨークのハドソンパレーでカルトをテーマにした誕生日パーティーを主催したという。ハドソンパレーは昔から数多くの「カルト集団」（ザ・ファミリー^{*}、ネクセウム、さらに無数の魔女）の本拠地として知られ、ウッドストック・フェスティバルの開催地でもある。誕生日パーティーのドレスコードは、「全身白づくめ」だった。白っぽいスリッパを身につけ、とろんとした目で「なんだか、とりつかれちゃったみたい」といった表情をした参加者たちのフィルターのかった写真が、私のインスタグラムのフィードにあふれかえった。

*「ザ・ファミリー」という曖昧な名前を隠れ蓑にしたカルト的な集団はいくつか存在するが、ここでいうザ・ファミリーは六〇年代に結成された、世界の終末を説くニューエイジ・コミュニケーションのひとつで、指導者はオーストラリアのサディスティックなヨガ教師、アン・ハミルトン・バーンだった。ハミルトン・バーンは（よくある話だが）自らを救世主と名乗り、八〇年代後半に逮捕された。一〇人以上の子どもを誘拐し、儀式として大量のLSDを投与するなど、常軌を逸した方法で虐待したのがその理由だ。

ここ数十年にわたり、「カルト」という言葉は極端にセンセーショナルなものになり、同時にひどく美化されたため、私が話を聞いた専門家の大半はもうこの言葉をまったく使っていない。彼らによると、「カルト」という語の意味があまりにも広く主観的になっていくために、少なくとも学術的な文献では使えないのだという。つい最近の一九九〇年代まで、学者たちは何の問題もなく、「社会から逸脱している」と多くの人々がみなしている「集団を説明するのにこの語を使っていた。だが、社会学者ではなくてもそのカテゴリーの分け方に歪みが生じたことがわかる。

一部の学者たちは、「カルト」という語をもっと正確にしようと試み、カルトに分類する具体的な基準を明らかにしようとしてきた。たとえば、カリスマ性のある指導者、精神状態を変化させる行動、性的および金銭的な搾取、メンバー以外の人々を区別して「私たちと他の人たち」を対立させる考え方、目的のために手段を選ばないという価値観などだ。アルバータ大学の社会学教授スティーヴン・ケントは、一般的に「カルト」という語は超自然的な信条をある程度掲げる団体に用いられてきたが、必ずしもそうとは限らないと付け加えている（普通なら、たとえば化粧品のマルチ商法に天使や悪魔は登場しない。一部の場合を除いては……詳しくは第4部で取り上げる）。だが、これらの団体の結末はすべて同じだとケントは言う。つまり、メンバーの献身、英雄崇拜、絶対的信頼が揃うと力関係に不均衡が生じ、多くの場合は説明責任のないリーダー側が権力を乱用するようになる。この信頼関係を維持する接着剤の役割を果たすのは、「リーダーは超越した叡智（オウジ）を手に入れた類まれな存在」というメンバーの信念だ。リーダーはそのような叡智によって、この世でもあの世でも賞罰体系を支配し、褒美と罰を自在に与えられるのだと、メンバーは信じ込んでし

まう。私が話をしたところでは、「本物のカルト」や「カルトの学問的定義」と聞いて一般の人たちの大半が思い浮かべるのは、こうした特性のように思う。

だが結局のところ、「カルト」に正式な学問的定義は存在していない。「それは本質的に非難の意味を含む語だからです」と、サンディエゴ州立大学の宗教学教授レベッカ・ムーアは電話インタビューで語った。「単に、自分が好きではない集団を説明するのに使われてきただけなのです」。ムーアは独特の立場から、カルトという研究テーマに取り組んでいる。彼女の姉と妹がジョーンズタウンの集団自殺で命を落としており、実際にはジム・ジョーンズに指示されて集団自殺遂行の手伝いをしてきた。ムーアは、「カルト」という言葉を本気で使うことはないと私に話した。その解は、明らかにそれぞれの判断に任せられるからだという。そして、「誰かがその言葉を使えばすぐ私たちは読者や聞き手として、あるいは個人として、その特定の集団についてどう考えるべきかわかります」と語った。

同様に、「洗脳」もメディアで絶えず話題にされている言葉だが、この本のために私が助言を求めた専門家のほとんどは、これを使うのを敬遠または拒絶していた。「兵士が人を殺すよう洗脳されるとは言いません。それは基本的な訓練によるものです」とムーアは言う。「友愛会のメンバーが「新入会員を」からかうよう洗脳されるとも言いません。それは仲間の圧力によるものです」。ほとんどの人は「洗脳」という言葉を文字どおりに受け取り、カルト集団の教えを叩きこまれていくあいだに、脳の神経回路が何か変わってしまうのだろうと考える。だが、洗脳というのは単なるメタファーで、実証できる何かがあるわけではない。

ムーアは、ジョーンズタウンの悲劇での姉妹二人の役割を考えれば、「文字どおり洗脳されることがある」と信じるのにうってつけの位置にいると言えるだろう。それでも彼女はその概念に反論している。ひとつには、洗脳という概念は「自分自身で考える」という人間の本質的な能力を無視しているからだ。人間は、意思決定の力が脆弱でいつでも消し去ることができるような、無力なドローンではない。もしほんとうに洗脳できるのなら、「もっとたくさんの危険な人たちがあたりをうろつき、非難されるべき悪だくみを計画しているだろう」とムーアは言う。端的に言うると、何らかの邪悪なテクニクを用いて誰かの脳を「洗い」、その人が絶対に信じたくないことを強制的に信じさせることはできない。

ムーアは二つめとして、洗脳は検証できない仮説だと論じる^④。ある学説が科学的手法の標準的な基準を満たすためには、反証の可能性が必要だ。つまり、その仮説が誤りであると立証される可能性がなければならぬ（たとえば、物体が光速を超えて移動を始めれば、アインシュタインの特殊相対性理論が誤りであることが判明する）。だが、洗脳が存在しないということを証明するのは不可能だ。誰々は「洗脳されている」と言った瞬間、会話はそこで終わってしまう。だから、その人の行動を突き動かしているものは実際に何なのかを探る余地はなくなる。結局のところ、その問いのほうかはるかに興味深いわけなのだが。

「カルト」や「洗脳」という語は、選挙候補の支持者から攻撃的な完全 채식주의者まで、あらゆる人々を説明するのに使われるようになって、セラピストぶった素人たちから大歓迎されている。理由を考える必要なしに自分が他人より心理的および道徳的に秀でていると感じる機会を、誰でも大

好きなのだ。大勢の人たちを「洗脳されたカルト信者」と呼ぶのは、まさしくそれにあたる。

すべての「カルト」が邪悪や危険とは限らないのだから、このようなマイナスの先入観は有害なものだ^⑤。実際、邪悪で危険なカルト集団は統計的にわずかしかない。パーカー（前出のロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの社会学者）によれば、彼女が確認した一〇〇〇を超える「カルト」（および「カルト」と呼ぶことのできる代替宗教集団）のうち、圧倒的多数はいかなる犯罪活動とも無縁だ。非主流派コミュニティが注目を集めるのは、ヘヴンズ・ゲートやジョーンズタウンのように何か恐ろしいことをしでかしたときだけだと、ムーアとパーカーは指摘している（そうした集団でさえ、はじめから殺人や暴力沙汰を起こそうとして作られたものではなかった^⑥）。ジョーンズタウンにしても、そもそもは人種差別撤廃論者の教会として設立されたものだ。ジム・ジョーンズが権力に夢中になるにつれて事態はエスカレートしたが、ほとんどの「カルト」では彼ほ

*これについては、おもしろい小話がある。一九五九年に南カリフォルニアのあるカルトが異様な入会儀式を行った。仲間に加わりたい者は、ブタの頭、脳みそ、生のレバーという悪夢のような料理を食べ、情熱を証明しなければならなかったのだ。するとリチャードという名の若い新人がその難題を達成しようと、口に入れたものを吐き続けながらもなお必死になって入会を望み、ようやく呑み込んだ。だがそう思った瞬間、とてつもない量のレバーが気管に流れ込んで息が詰まり、病院に運び込まれたときにはすでに息絶えていた。だが、刑事告発はされていない——この集団は実際には「カルト」ではなく、南カリフォルニア大学の友愛会で、新入会員をからかうための数えきれないほどの儀式のひとつをやっていただけだったからだ。そうした儀式には、もっと奇抜で吐き気を催す、命がけのものも多く、ほとんどの代替宗教で行なわれる儀式よりも多くの嘔吐物（および別の体液）がまき散らされる。

ど破滅的な悪循環に陥ることはない)。要するに、スキャンダルのフィードバック・ループが生まれている——非常に破壊的なカルト集団だけが注目を集めるので、私たちはすべてのカルトが破壊的だと思おうようになる。そして破壊的なカルトだけをカルトとして認識するので、そうした集団がさらに注目を集め、マイナスの評判が強まっていく。その繰り返しが際限なく続くわけだ。

同じように厄介なのは、「カルト」という語が、社会に認められていない宗教を中傷するのを承認するために、しばしば使われてきたことだ。現時点で非常に長きにわたって存続してきた多くの宗派（ほんの一部を挙げるだけでも、カトリック、バプテスト派、モルモン教、クエーカー教、ユダヤ教、ネイティブアメリカンのほとんどの宗教など）は、アメリカではかつて神に対するとんでもない冒涜だとみなされていた——信教の自由を基盤として築かれた国なのに、そんな状態だったのだ。現在、エホバの証人からウィッカ（魔女を信仰する集団）まで、アメリカの代替宗教は（圧倒的なものもそうでないものも）広く一般に「カルト」とみなされている。中国政府は新宗教である法輪功（ほうりんこう）について、瞑想を通じた忍耐と思いやりといった平和的な教義をもつにもかかわらず、カルト的な邪悪な集団であるとは何度も非難している。またパーカーによると、カトリック信者が多数派のベルギーでは、公式報告書でクエーカー教徒（とても質素な暮らしを追求した宗教）が「カルト」として挙げられている（フランス語の *culte* は中立的な意味を保ち続けているので、実際に使われていた語は英語のカルトのニュアンスに近い *secte* 「セクト」だった）。

世界中どこでも、宗教団体が合法だとみなされるかどうかは、いまだに文化的規範に左右されることが多い。その教えが、すでに世間から認められた宗教よりも奇妙なのか、あるいは有害なのかは、実際には関係ないのだ。結局のところ、主要な宗教指導者で、手を血で汚したことがまったくない者などいるだろうか？ 宗教学者のレザー・アスランが言ったとおり、「宗教研究で最大のジョークは、カルト十時間Ⅱ宗教という図式が成り立つことだ」。

アメリカではこれまでモルモン教とカトリックが十分に長いあいだ存在してきたから、人々の承認を得るようになった。それらは宗教としての地位を確立することで、ある程度までみんなから尊重されるようになり、重要な点として、米国憲法修正第一条（表現や宗教の自由）で保護されるようになった。この保護は気まぐれだから、何かに「カルト」のラベルを貼ることは単なる価値判断ではすまず、それによって実際に生死に関わる成り行きが決まってしまう。ノースイースタン大学でアメリカの代替宗教を研究しているメーガン・グッドウィンの言葉を借りれば、「何かをカルトと認定した結果、現実にはさまざまな政治的問題が発生し、多くの場合は暴力的なものになる」。

そうした事態とは、どのようなものだろうか？ ジョーンズタウンの例を考えてみるとよくわかる。ジョーンズタウンの犠牲者たちは、マスコミによって「カルト信者」と認定されたたん、下位の人間に格下げされてしまった。ジョーンズタウンに着想を得た小説『美しき革命家』の著者ローラ・エリザベス・ウーレットは、次のように書いている。「その結果、一般の人々はこの悲劇と犠牲者から距離を置きやすくなった。そして犠牲者は、弱くてだまされやすく、生きるのに適さない、死後に敬意を払う必要もない人たちにすぎないと切り捨てられた。死体の検視は行なわれず、遺族は犠牲者の亡骸をすぐには引き取らなかつた」。

「カルト信者」と決めつけることで起きた最も重い失敗の例は、おそらくブランチ・ダビディアン